

令和三年度 中学生の「税についての作文」入選作品

【東京国税局長賞】

支えてくれてありがとう

長南町立長南中学校 一学年 鈴木 星乃莉

今年一月、いつも元気な兄が、一度目の入院をした。前触れなく突然肺に穴が開いてしまう病気だった。世の中はコロナ禍真っ只中で、テレビでもネットでも、「ステイホーム」「医療逼迫」「不要不急の外出自粛」と、どこを見ても不穏な雰囲気であふれ、病院に付き添った母からの連絡を待つ間も、「この先どうなってしまうのだろうか」と、とても落ち着かない気持ちで過ごしていた。幸い、この時は肺から漏れ出した肺の中の空気を抜く処置をし、四日間退院することができた。

二度目の入院は、兄が高校生になった四月だった。一度目の時よりも症状が重く、この時は手術をすることになった。一度目の時からたった二〜三カ月の違いだったが、高校生になると「小児科」から「一般」へと、扱いが変わるらしい。前回の小児科の時は必要最低限の面会の許可が下りていたが、一般病棟への面会や付き添いは、感染症予防として一切の許可が下りなかった。つまり、手術をして動けない兄の世話は、完全に病院の方々に頼るほかないという事だ。入院の経験が無い私でも、本当に心細く不安しかない状態だった。

無事に手術も終わり、兄は一週間ほど退院となった。兄の無事にほっとしつつも、私の心の中には少し不安が残っていた。「二度の入院と今回の手術となると、私には想像もつかないほどの大きなお金が動くのでは？」と。思い切って母に聞いてみた。すると、なんと「一度目の入院ではお金を払わなかった。」と言うではないか。私たちの住む町では、中学生までの医療費は、町と県とで負担してくれるという。今まで私が病院にかかる時も、保険証と一緒にもう一枚、「受給券」と書かれているカードを受付に出すのは知っていたが、まさか、そんな風に私たち学生が守られているとは知らなかった。そんな自分を少し恥ずかしいと思った。また、二度目の入院でも様々な補助制度があり、支払った金額はかかった金額のほんのわずかの額だったという。兄の入院を機に、私は税金について勉強を始めた。まだまだ分からないことだらけだが、今まで漠然と疑問に思っていたことが、少しずつパズルのピースのようにカチツと解ってきた。コロナや特定疾病等の病気にかかってしまった際に、私たち国民を守ってくれる法律がある事。今年の夏も各地で豪雨災害が発生しているが、そういう時でも被災者に寄り添ってくれる金銭的な補助がある事。まだまだコロナと言う困難な状況が続く中でも、ここまで、大人たちが守り繋げてくれた有難い制度だと思った。今は守ってもらう事の方が多いい私だが、いつの日か、私もしっかりと「守り、繋げる」立場の大人になりたいと思う。兄を救ってくれた全ての人に、感謝をこめて。今この瞬間も、がんばって下さっている医療関係者の方々に、感謝をこめて。そして同時に、心身共に出来る限り健康でありたい。